

秀賞

本のチカラ

福島県郡山ザベリオ学園中学校

2年 星 碧

「はい、おみやげ。」

仙台に出かけた母が、ニコニコしながら黒い袋を渡してきた。中には1冊の本が入っていた。母が本を買うといえば、いつもオンラインなのにどうしたのだろう、と疑問に思ったけれど、袋の「塩川書店」の文字を見て思い出した。母が行きたがっていた本屋さんだ。

郡山に住む私が、仙台の塩川書店のことを知っているのは、1冊のマンガ雑誌がきっかけだ。13年前の東日本大震災後のこと。

「子どもが震災の映像を見て怖がっているから、絵本やマンガを読ませたい。」という話を聞いた本屋の店主・塩川さんは大急ぎで店を片付け、地震の次の日から店を開けたという。しかし、交通がとだえてマンガ雑誌の配達ストップ。一人のお客さんが遠い山形まで行って買ってきたマンガ雑誌を、

「みんなで読んで。」

と、塩川書店にゆずってくれたのだという。本屋さんなら、立ち読み禁止だけれど、塩川さんは立ち読みOKにして、みんなで回し読みできるようにしたのだ。塩川書店のことが新聞報道されると、全国からマンガや雑誌が大量に塩川さんの元に届き、それら全てを立ち読みOKにしたそう。その時、マンガを読んでいる中学生の写真を見たけれど、とても震災直後とは思えないくらい、優しい笑顔をしているのが、私にはとても印象的だった。連載の続きを楽しみにしている読者が、マンガを読んでいる時だけでも震災前の日常を思い出してほしい、とマンガを提供したお客さんは思ったのではないだろうか。立ち読みOKにした塩川さん、順番を守って回し読みをした読者たち、全国から寄せられた本の寄付。1冊のマンガ雑誌をきっかけに、思いやりが連鎖していく様子に、心があたたまっていく。この出来事は、マンガや本が持つ力を教えてくれる。

マンガが持つエネルギーの大きさは、私にもよく分かる。私の将来の夢は、小児外科医になることだ。小さいころから鼻や喉が弱く、しょっちゅう耳鼻科を受診する中で、

「自分もいつか、お医者さんになりたい」

と思うようになった。それが「小児外科医になりたい」とはっきりとした目標に変わったきっかけになったのは、母の本棚で見つけた1冊のマンガだった。

主人公は小児科の医師。ドジな主人公が、仲間の医師に助けられながら、使命感に燃えて治療に立ち向かう姿に、強い感動を覚えた。その年のクリスマスに、サンタさんから贈られたのが、小児外科医を主人公にしたマンガだった。そのマンガを手にしたのは3年以上前のことだけれど、何度も何度も読み返している。医師としての覚悟を持ち、手術に失敗するかもしれない恐怖を乗り越えて前に進む主人公の姿に、たくさんの勇気ももらっている。その後、続編もプレゼントしてもらった。続編は、決して優秀とはいえない主人公の高校生が、父の命を救ってくれた医師の姿に憧れて、さまざまな困難を乗り越えて医師になる物語だ。医師になることはそんなに簡単なことではないことは、私もよく分かっている。どんなに頑張っても医師にはなれないかもしれない、と不安になることが何度もある。そんな時、あのマンガの主人公の姿が思い出されて、「また頑張ろう。」というエネルギーを私にくれる。

マンガだけではない。小説からエネルギーをもらうこともたくさんある。友達との関係に悩み、不安になる時、暗い気持ちになった時、何気ない時。さまざまな本が、私の想像力をふくらませてくれて、一瞬にしていろいろな場所、いろいろな時代、さまざまな状況に、私を運んでくれる。新型コロナウイルス感染症が拡大して休校になった時、外出を我慢しなければならなかった時も、マンガや本が私にくれたエネルギーの大きさは、はかりしれない。

東日本大震災と、その後の原子力発電所の事故。放射性物質の影響を心配した母は、当時0歳だった私と2歳の姉を連れて、父と離れ、地元の郡山を離れ、母はたった一人で二人の子どもを育てながら2年間、避難生活を送った。何が母のエネルギーとなり、そこまでふんばれたのか聞いてみた。

「子どものため、って思ったから頑張れたよ。それに、たくさんの人が助けてくれたおかげかな。自分一人だけだったら、あんなに頑張れなかったな。」と母が言った。マンガや本からエネルギーをもらっている私が、母の頑張るエネルギーになっているなんて、なんだか不思議な気持ちだ。そして、見知らぬ人の思いやりに、私は支えられている。

あの塩川書店は、8月で閉店が決まった。母が塩川書店で買ってきてくれた本を、また私のエネルギーに変えて、小児外科医になるという夢を実現したい。